



ジオパークだより

日本ジオパークネットワークと 土佐清水ジオパーク構想が目指すもの

2019年11月2日から4日にかけて大分県で、日本ジオパーク全国大会が行われました。全国大会は、ジオパークに関わる多様な人たちと意見交換する貴重な機会。今回の参加では、ジオパークが目指す理念や、現在の土佐清水の立ち位置を改めて確認することができました。

ジオパークにおいては、ネットワーク活動や理念の共有がとても重要。ネットワークを通じて、地球の記憶の保全や持続可能な発展といった理想とする社会の実現を目指すというのがジオパークの考え方です。郷土愛の醸成やジオツーリズム等による地域の発展も大切な要素ですが、地域自慢や自分の地域のみでの発展だけを考えるのでは、十分ではありません。

昨年、現地審査に来ていただいた長谷川修一先生（香川大学教授）がネットワーク活動の重要性を語る際、次のようなアフリカのことわざを用いていました。

「早く行きたいなら一人で行け、遠くへ行きたいならみんなで行け」

つまり、ジオパークはとても高い理想を目指すもの。だから、様々なスキルや個性を持った仲間と一緒に進んでほしい。

土佐清水ジオパーク構想では、多様な仲間とともにジオパークを通じたコミュニケーションから新たな価値を作り出し、地球に寄り添ったしなやかな地域づくりを目指しています。そして、土佐清水から社会全体の持続可能な発展のために貢献していきたいと考えています。



全国大会は、大分市と豊後大野と姫島の2つのジオパークを会場に行われました。



豊後水道に浮かぶ
姫島南部の遠景

ジオパーク全国大会に参加して 姫島の黒曜石から考察する 東アジア・東南アジアにおける土佐清水

土佐清水ジオパーク推進協議会 学術アドバイザー 田村 公利

郷土の素晴らしさを
伝えるため、日々、
奔走中！



生涯学習課市史編さん室長

ジオパーク推進協議会学術アドバイザーとして、日本ジオパークネットワーク全国大会に参加。姫島のジオツアーを体験してきました。

姫島と土佐清水は、縄文時代から黒曜石流通の繋がりがあり、四国西南部では姫島産黒曜石を使用した縄文時代の石鏃が幾つも発見されています。一般的な黒曜石は、黒色であるのに対して、姫島産黒曜石は灰色がかっているため、他地域のものとは容易に区別することができます。今回、姫島北西部にある観音崎では黒曜石を孕んだ崖を見ることができました。

当時、土佐清水に居住した縄文人にとつてこの黒曜石は、加工するのに適した貴重な石材で、姫島から豊後水道を南下し、はるか四国最南端の土佐清水市に海路にてもたらされました。姫島は古代朝鮮半島との関わりがあり、その伝説が『日本書紀』や『古事記』に登場します。このツアーでお会いした京都大学名誉教授・竹村恵二氏は「東アジア交流拠点として姫島を位置づけている」と述べています。これは土佐清水も同様で、陸路主体の現代においては、首都圏から遠く、「僻地」と言われますが、「海路」を中心に考察したとき、「東アジア・東南アジアの土佐清水」という見方が成り立ちます。ジオパークでは、地域の特徴的な地質のみを捉えるのではなく、海路を中心にした交流史にも着目し、民俗学や考古学等の学問とも連携のうえ、歴史的視野で郷土「土佐清水の独自性」を再構成する必要があります。と私は思います。

